

昔は高等学校（旧制）に入れば酒やタバコは初めて当たり前ということになっていた。私もそうだった。まだ満では18才にもなっていなかった。

その後、軍隊へ行き、戦地（中国大陸）へ行くようになる、気が高まっているせいもあっただろう、タバコは1日百本以上となり、酒は一寸腰を据えれば一升という程に手が上がっていた。無論将校仲間でも1日過ぎて日が暮れば、「ああ、1日生命があつてよかったな。まあ一杯飲もうか」という工合になっていた。内地の酒、まして灘の生一本など思いもよらぬ、現地産の合成酒であつて、余計飲むと頭に来るといふので、アタピンと称させられていた。しかし、馴れというのはあるもので、そのうち一升飲んで何ともなくなつて来たから妙なものであつた。

ビールは上海の第13軍の貨物廠に製造のかかるサカエビールが主で、味はともかく、飲むと小水の出がつかまるようだといつて評判は良くなかつたが、暑い漢口の夏にはそれでも欠かせないものであつた。

そのわれわれが、所かわつて北朝鮮での終戦後、ソ連邦はタタアル自治共和国の小都市エラブガの収容所で暮らすことになつたのである。

初めは、ひどい食糧不足で（ノルマはあつたが、ソ連の管理者側が横流しをせつせとやつていたらしい）1人平均10キロも痩せるような始末であつたから、いかにして食べ物を確保するかに神経が集中していた。それが、ソ連側の食料事情も良くなつてきたのだから、それにノルマを確保せよという運動が功を奏して、まあ痩せながらも何とか体重を維持できるようになつて来ると、次はアルコールをとることになるのであつた。

猿でも酒を造つて飲むという。人間が酒を造れないわけがない。とばかり、いろいろ工夫をして酒を造るようになった。

一つは、毎日配給される黒パンの耳などを溜めておいて、水筒に入れ、パン工場から酵母菌を分けて貰つて加え、ペチカの上に吊るしておく、さあ10日ぐらゐると、水筒の栓がポンとはねる。アルコールが出来たよという合図であつた。むろん、うまいというほどの出来ではないが、干天の慈雨というか、とにかく甘露々々なのであつた。配給の砂糖を加えれば、なお出来がよくなつた。

次は、じゃがいもである。これはよく蒸して、やはり酵母菌を加えアルミの皿に入れてペチカの上に置いておくと、やはり10日間ぐらゐでアルコールが誕生しているのである。これは飲むというわけにはいかぬ、スプーンで掬つて食べるのである。

次は、ラーゲルの外のマガジン（小売店）で売っているウォッカの密輸入である。これは一寸手間もかかるし、冒険であつた。冬は外套を着ている。その中に水筒を吊るしておいて、食糧運搬班が倉庫に食糧を受領に行く時にコンボイ（護衛兵）の眼をごまかして、マガジンのおばさんに水筒と金を預け、次の機会に受け取るという仕組みであつた。当時ウォッカは1リットル100ルーブルという懲罰的な値段であつたが、将校が支給される月15ルーブルのうちから1人10ルーブルぐらゐづつ供出して買うのである。

この貴重なウォッカは、ただで飲むわけにはいかぬ。砂糖を加え、牛乳を加え、ついでにすぐりなぐの実を加え、10倍ぐらゐに伸ばして飲むのである。

ウォッカは60度ぐらゐのアルコール度数だから、10倍に伸ばしても6%のアルコール

分、ビールくらいの頃合になるから。アルコールの切れた身体は陶然たる酔いを与えてくれる。

ただし、この密輸方法には当然危険が伴うので、吊るしてある水筒も見破られて捕まえられたこともある。重営倉である。食事も1日1食ぐらいに処罰となる。それで、犠牲者を助けるために衛兵のもっている鍵を何と言って借り出し、鍛工場でコピーを作り、それを使って夜分しつかり差し入れをしてやったりした。ラポータ（労働）なしで食事が出る、というので喜んでいた。

公然とアルコールを飲める時が1日だけあった。メーデーの日である。1人当り2000C Cだったか、買いに行つて、良いと許可が出た。5千人の収容人員であったから1000リットル。ビール工場から重いビア樽を運ぶのに難儀したが、とにかく晴れて飲めるビールは、何よりもうまかったし、酔つてメーデーのデモの真似ごとをやった覚えがある。その時は、ビール工場の現場のじいさんに鼻葉をかかせてビア樽1本を余計に運び出したと記憶している。

鏡に怨みは数々ござる、というセリフがあるが、酒の怨みも深いものだなあとふと思つてことがある。